

日時:2013年5月8日(水) 午前10:00~11:15

場所:NNI 香港、会議室 6/F & 10/F, Tower One, Lippo Centre, 89 Queensway, Central

香港ママの便利帳主催セミナー 『乳幼児の健康、気になる子どもの言動』

合田美穂(香港中文大学兼任助理教授、精神保健福祉士)

はじめに: 講師紹介、今日のセミナーの概要

乳幼児の心身健康問題、特に言動面における気がかりなことについてお話します。なぜか手がかかる、しつけの問題なのかわからない・・・など。病気や障害かもしれないという見方をするのではなくて、気になる言動に対して、何を気にかければいいのか、どう対応すればいいのかを考えていきます。

1, 気になる子どもの言動の例 および それらの行動特徴に対して家庭や学校でできる具体的な対応例

- (1) 曲がったことが大嫌い
- (2) いつも同じだと安心する(違えば怒ってパニックになる)
- (3) 音や味に敏感である
- (4) 耳や目のバランスが悪い
- (5) 注意の持続が困難である
- (6) 記憶力がよすぎる
- (7) 相手の気持ちがわからない
- (8) その他の効果的な対応方法
 - 1) 叱責(特に罵声や体罰)よりも、適切な行動をとった時にほめること
 - 2) 計画的なトークン(ごほうび)が効果的
 - 3) 当事者にかかわる大人(親や教師)の間では、理解と協力は不可欠

→これらのことは、どの人にも多少なりともあることです。それが顕著であるか、その傾向がやや強いのか、あまりそういう傾向がないか・・・など、人によって個人差があります。

2, それらの言動が社会生活を送る上で顕著になった場合(例)

- (1) 特に就学前から、視線が合わなかったり、呼びかけても反応しないことが顕著になる。
 - (2) 子どもの遊びなどに興味を示さない。
 - (3) 協調性がないために、小学校に入ってから、友達を作りたいのに作れない状態が続く
- 以上の特性は、「どの人にも多少なりともあること」で、「全く完全に当てはまらないという人はおらず、このうちのどれかが少しはあるはず」ですが、それが「あまりにも顕著で、社会生活を送る上で、困難な状況になる」場合は、以下の可能性もあるかもしれない、ということを念頭におくことも必要です。(こういう知識があったほうが良いということで、ご紹介をします。)

3, 発達障害に関連した名称

- (1) 広汎性発達障害について
- (2) 広汎性発達障害の3つの中核症状
 - 1) 対人関係 (例:相手の気持ちを思い測ることが苦手で、対人関係がうまく築けない)
 - 2) コミュニケーションの障害 (例:会話のキャッチボールができず、コミュニケーションがうまくとれない)
 - 3) 限局した関心と活動 (例:こだわりなどがあるために、独特の行動パターンを作る)
- (3) 自閉症(人口の1%程度)
- (4) アスペルガー症候群(ICD-10による診断名)、アスペルガー障害(DSM-IVによる診断名)
3つの中核症状はあるものの、知能・言葉の遅れはない。
- (5) AD/HD(注意欠陥/多動性障害)
 - 1) 注意力が散漫
 - 2) よく動き回る
 - 3) 待つことや行動を切り替えることが苦手等の特徴がある
- (6) 学習障害
- (7) 発達障害でありながらも、特異な才能を持つ有名人にはどんな人がいるか
- (8) よく誤解されている発達障害の原因
 - 1) 心理的な原因で生じる情緒障害
 - 2) 育て方や養育者の性格などが原因
 - 3) 食べ物、摂取物が原因
 - 4) 物理的な外因

※ これらは誤解です。養育環境による内向的な性格や言語の遅れなどと、発達障害とは、はっきり区別するべきものとして理解することが大切。
- (9) 発達障害の原因:脳内の情報処理の仕方に障害があるといわれ、いくつかの仮説がある
 - 1) 「生まれる以前からの素因があり、ある段階に症状が出現する」という考え方が有力。
 - 2) 症状の多様性や、経過が大きく異なることから「ひとつの原因だけではなく、様々な原因の総和として症状が現れる」とする考え方もある。
 - 3) 「素因、発症、抑制などの様々な遺伝子が関与している多遺伝子、多因子によるものであろう」とされる考え方が支配的。

4, 発達障害、または、子どもの特性は、「治す」のではなく、「共存する」「理解してうまくやっていく」という考えが大切

もし、発達障害(と診断されたとしても、名称は障害ですが)を「障害」として捉えるのではなく、「子どもの特性が強いため、社会生活を営む上で困難になっている」、「脳の動きのパターンがほかの子どもと異なる」、「ほかの子どもに比べると個性的であり、子どもが持つ特性について理解する必要がある」、「子どもの特性に応じた対応方法の知識があったほうがよい子育てができる」と考えることが大切。

→子どもの特性、発達障害は幅広いものであり、治すべきものというのではなく、「共存していこう」という考え方が重要だと考えられるようになっている。